



Executive Interview

エグゼクティブ
インタビュー

no. 18

このコーナーは神奈川トヨタのお客様である経営者の方にお話を伺うコーナーです。

有限会社 結城商事輸送 代表取締役

結城 恵美 様

横浜市港北区菊名に本社を構え、栃木・長野にも営業所を展開し、広範囲にわたる輸送を行う有限会社結城商事輸送。2代目に就任して10年、職場環境の整備や労働法規遵守の徹底など、意識改革と技術向上を目指す代表取締役結城恵美氏にお話を伺いました。

■車好きの先生が2代目に

——以前は幼稚園に勤められていたそうですね。

幼稚園の仕事は小さい頃からやりたいと思っていて、ずっと続けていきたいと思っていました。海外に勤めるのが夢で、ドイツの幼稚園に縁があって行くことも決まっていたところ、父が心筋梗塞で倒れ、ドイツ行きを見送り、この道を選ぶことになりました。

幼稚園に勤める前には、会社を継がずに自分のやりたい道を選んでいいのか悩んでいた時期がありました。ですがやはり、幼いころからの夢は諦めきれず、幼稚園の先生になり、ドイツから帰ってきたら父の会社に入るつもりではいたんです。やりたいことはやらせてもらって、区切りをつける。タイミングの問題で予定より早くなってしまいました。

周りからは「やらなくていい」と言われました。そう言われると、「じゃ、やってやろうじゃない！」と反抗心のような気持ちが湧き上がり決断しました。周りも

私のそういう性格を分かっている、それが戦略だったのかもしれない。策にはまっちゃったかなという感じです。

——資格など必要となるのでは？

大型免許と危険物取扱の資格は入社前に取っていました。

——幼稚園の先生がなかなか大型免許は取りませんよね。

もともと車自体は好きだったんです。父も車は大好きで、いつも身近にありました。大型免許も全然抵抗なく取っていました。今思えば、そういうのも父の策略だったのかもしれない。

——仕事をしていて良かったと感じること、大切にしていることを教えてください。

運送業というのは、人。喜んでいただける、感動していただける、ありがとうと言ってもらえる。作り手の思いも一緒に届けるということ、一人ひとり思っ



ですけど、人がどう対応するかによって、そういうものまで伝わるのかなって思っています。

昨年、うちのドライバーがトラックドライバーコンテスト長野県大会で優勝しました。コンテストでは運転の技術はもちろん、国家資格試験と同じような運行管理や法規の筆記試験、制限時間内で行う整備点検等で競います。

大手運送会社も出場する中、長野営業所からコンテストに初出場して、1位2位がうちの会社だったんです。長野県では営業所を立ち上げたばかりで無名だったんですけど、ドライバーの快挙で新聞にも取り上げていただき、少しは知名度が



“作り手の思いも一緒に届ける”

ということを

一人ひとりが思っ

上がったかなと思っています。受賞後、ドライバーが「社長、僕たちが日頃やってきたことは間違いじゃありませんでしたね」って私に言ってくれたんです。それはすごく嬉しかったです。

大きい会社がたくさんある中で、確実に一步一步できることを間違いなくやっていけば、誰かが認めてくれる。やる気があれば、努力すれば高い壁でも何とか越せるんじゃないかということ、今回のことでも感じました。

■震災が教えてくれた仕事の意義

——東日本大震災での影響はやはり大きなものでしたか？

栃木に自社のガソリンスタンドを持っていたのでガソリンがなくて走れないトラックが多い中、走ることができました。救援物資を届けたり、やらなければいけないことを即座に行動に移せたことは凄くありがたい経験です。トラック協会でも、「我々はライフラインを支えています」と日頃から謳い文句にしていますが、震災の時は本当にそうだなと実感しました。こちらは物資を届けただけなのに、被災地ではとても感謝されました。「こんなに人に感謝される仕事は今までなかった、逆にこっちが泣きました」と言って帰ってきたドライバーもいました。お役に立てて良かった。これは仕事の基本だと思うんですね。役に立たない仕事はなくて、それを実感できるかどうかということだと思います。お互いに感動できる瞬間というのがあっていいのは凄く良かったなと思いました。災害は無いに越したことはありませんが、仕事のありがたみを感じられた瞬間でした。

——保存食用パンの缶詰の販売もやっていらっしゃるようですが、これも震災と関係があるんですか？

パンの販売は震災の前からやっています。救済は元々海外の飢餓の国に向けて作られたものです。東日本大震災時には救援物資として運ばせていただきました。パンの缶詰自体は、(株)パン・アキモトの秋元社長が、阪神淡路大震災の時、「災害時に便利な長持ちするパンを作りたい。被災して苦しい時でも、美味しいものを食べてもらいたい」という一心で10年かかって開発したものです。

私は容器を取り扱っていることもあり、スーパーやコンビニに行ってもパッケージを確認する癖があります。そこで目にした製造元が栃木県にある会社だったので栃木営業所の仕事にならないかと、秋元社長のもとへ飛び込みの営業に行きました。まず配送から始まり、今では代理店から小売りもさせていただくようになりました。本当に会いあってありがたいと思っています。もう10年以上の付き合いです。



パンの缶詰「救済鳥」
賞味期限3年のうち、2年間は有事震災用の非常食として備蓄。残り1年の間に回収輸送され、飢餓に苦しむ国々へ届けられる。容器は、食器として利用されメッセージを記入できる。

有限会社 結城商事輸送

〒222-0011 神奈川県横浜市港北区菊名7-7-17
TEL 045-434-3388 (代)
URL: <http://www.yuuki-shouji.com/>
栃木営業所
栃木県塩谷郡塩谷町大字田所字寺中718-8 TEL 0287-46-1121
長野営業所
長野県長野市神明50 TEL 026-285-0537
乙畑倉庫
栃木県矢板市乙畑字三角山1848-1 TEL 0287-48-2858

■明るく健康で仕事ができる環境を

——今後の目標を教えてください。

社員の平均年齢が42歳くらいなんです。だんだんみんな歳をとってきているので、健康管理が一番です。少しでも長く勤めてもらいたいです。

良い食事と良い睡眠をとって、正しい健康管理ができる環境になるような会社作りをすることが目標です。事故防止や安全管理の面から、深夜時間帯の運行は控えるようにしています。「夜間にあれば朝イチに着くだろう」と言われることもありますが、次の仕事に着く前に8時間休息を取らなくてはいけないという運行規則があります。「今出発すると朝イチには到着できません」と言うのと、そんなこと言うのはお宅だけだよと仕事なくなるパターンもあります。こういうことを変えられる業界じゃなきゃだめだと思うんです。今は労働力不足で運んでくれる人がいないという問題も抱えています。明るく健康で仕事ができる運送業界じゃなきゃだめなんじゃないかと思っています。そういうところをちょっとずつ発信して、業界自体を変えていけるようにできればいいなと思います。

<インタビューを終えて>

まだまだ男性が圧倒的に多い業界での困難は計り知れないものがあると思います。自ら学び懸命に働く姿で、社員をまとめ引っ張っていく。煙たがられることを恐れず自分が信じるべき姿を指導。コンテスト入賞で、今までやってきたことが間違いではなかったと思えたという言葉に、これまでの苦労と葛藤に思い至り、胸が熱くなりました。